

【日本の大学】第9回——筑波大学：研究学園都市の中核担う

筑波大学のある筑波研究学園都市は首都東京から北東へ約 60km、茨城県南部のつくば市に位置する。中核を占める研究学園地区は南北 18km、東西 6km に広がり、面積は 2700ha の広大な敷地を誇っている。約 60 もの教育・研究機関を擁する日本有数の学術都市を形成しており、日本屈指の最先端研究開発拠点として発展している。国立の研究機関としては全体の 3 割に当たる 30 以上の研究機関が集積、約 2 万人の研究者が研究活動を行っている。

筑波大学が筑波研究学園都市に開校したのは 1973（昭和 48）年である。文系・理系から体育、芸術に及ぶ学問を探究する総合大学として開かれ、現在も、同研究学園都市の中心的な役割を担い、産学官の連携拠点の構築、創造を目指している。



ルーツは師範学校

以下、大学のホームページなどから沿革や教育・研究の現状を見ていこう。

大学のルーツは 1872（明治 5）年に日本で最初に設立された高等教育機関である師範学校までさかのぼる。東京・湯島にあった江戸幕府の直轄学校である昌平坂学問所が前年 1871

年に閉鎖され、その跡地に設立された。翌年には東京師範学校となり、1879（明治12）年には全科を予科、高等予科、本科に分け、体操伝習所や東京女子師範学校（のちのお茶の水女子大学）を合併した。

1886（明治19）年、高等師範学校に改称し、1902（明治35）年に、広島に高等師範学校が設置されたことで、東京高等師範学校となった。

高等師範学校と言えば、日本の学校教育の充実、体育・スポーツの発展、オリンピック・ムーブメントの推進などの功績を残した嘉納治五郎氏の名前を挙げる必要がある。東京帝国大学を卒業後、講道館柔道を創設し、その後、高等師範学校、東京高等師範学校の校長を3期23年半務めた。校長時代には、学生に自由な気風を植え付けるとともに、課外活動の導入や留学生の受け入れなど、当時においては画期的な教育改革を行った。日本の高等教育を国際社会に開いた先駆者だったと言えよう。筑波キャンパスには嘉納治五郎氏の像が立っている。

第2次大戦後、1949（昭和24）年には東京教育大学が開学した。これは、東京高等師範学校のほか、東京文理大学、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校の計4校を包括して設立したもので、学部は文学部、理学部、教育学部、農学部、体育学部の5学部でのスタートだった。



手狭で適地を探す

筑波大学の校章は「五三の桐葉型」で、1903（明治 36）年に改定された東京高等師範学校の生徒徽章が始まりで、1949 年に制作された東京教育大学の学生バッジに受け継がれた。1974（昭和 49）年に、大学の評議会において「校章は東京教育大学の伝統を引き継ぐ桐の葉とすること」が承認されている。

東京教育大学は、文学部・理学部・教育学部の 3 学部が大塚キャンパス、体育学部は幡ヶ谷キャンパス、農学部は駒場キャンパスに分かれ、しかも、当時のメインキャンパスの大塚地区が手狭であり、ほかのキャンパスとは距離的にも離れていた。一般教養の課程はなく学生は入学時点で各学科や専攻に所属していた。このため、大学の移転が大きな課題となっており、大学は早い時期から適地を探していた。

一時、東京・八王子への移転も検討されたが、予算や用地買収などで困難と判断して断念。1963 年に筑波研究学園都市の建設が閣議決定されたことで、筑波への移転問題が浮上した。研究学園都市の中核施設の一つとして国立の総合大学が構想されており、東京教育大学がその条件を満たしているとして文部省や大学内部で検討が進んだ。

1967年には大学の評議会は、筑波に土地を確保することを決定したが、反対の評議員もあり、多数決での決定となった。学生は移転に反対を表明し、ストライキに入るなど翌年にかけて闘争が拡大、68年1月の入学試験が中止となるなど、混乱が続いた。

そうした中でも、移転推進派は着々と移転計画を進め、1971年には「筑波新大学に関する基本計画案」を決定。文部省側でも別途、「新大学プラン」が練られた。

1973年2月には筑波大学法案が閣議決定され、9月に国会で成立し、10月に筑波大学が「新構想大学」として開学する運びとなった。



大学は、建学の理念として次のような点を挙げる。

「基礎及び応用諸科学について、国内外の教育・研究機関及び社会との自由、かつ、緊密なる交流連携を深め、学際的な協力の実をあげながら、教育・研究を行い、もって創造的な知性と豊かな人間性を備えた人材を育成するとともに、学術文化の進展に寄与することを目的とする。

従来の大学は、ややもすれば、狭い専門領域に閉じこもり、教育・研究の両面にわたって

停滞し、固定化を招き、現実の社会からも遊離しがちであった。本学は、この点を反省し、あらゆる意味において、国内的にも国際的にも開かれた大学であることをその基本的性格とする。そのために、変動する現代社会に不断に対応しつつ、国際性豊かにして、かつ、多様性と柔軟性を持った新しい教育・研究の機能及び運営の組織を開発する。更に、これらの諸活動を実施する責任ある管理体制を確立する——」

さらに、大学に根ざす人材育成マインドである「師魂理才」に基づいて教育を進めるとしている。師魂理才とは、親や先生のように人に接する心や人々をまとめる力を持ち、かつ合理的な問題解決の才能を持つことを意味している。

教育大学としての伝統を受け継ぎ、国立大学としては希少である体育学、芸術学、図書館情報学などの分野を持っているのが大きな特色であろう。



独特の「系」や学群・学類

筑波大学の教員は独自の組織としての「系」に所属しており、基盤的な研究を行いつつ、学群・学類、研究科・専攻、センターなどそれぞれの教育研究組織の目的に即した教育研究を担う。個々の教育研究組織から独立させることにより、各教育研究組織に異なる分野の教員が参画することが可能になり、学際融合・領域横断的な教育研究、新たな教育研究プログ

ラムの創出を柔軟に行っていく。「系」は現在、広範な学問分野にわたる 10 の系（人文社会系、ビジネスサイエンス系、数理物質系、システム情報系、生命環境系、人間系、体育系、芸術系、医学医療系、図書館情報メディア系）がある。

学部、大学院（学科）に当たるものとしては「学群」と「学類」が担う。学群は、他大学における学部段階の学生に教育を行う組織で、専門領域を中心としていくつかの学問分野を総合した形で構成。専門的な能力を必要とする分野（体育・芸術）には、一貫教育を行う専門学群を置いている。また、学類は、学群に置かれ、学生の教育に責任を持つ組織であり、学生はこの学類に所属する。



大学では、従来、人文学類、社会学類、自然学類の学類を第一学群、“学際科学”を特徴とする 5 学類（比較文化学類、日本語・日本文化学類、人間学類、生物学類、生物資源学類）を第二学群、工学を中心とする第三学群、ほかに医学専門学群、体育専門学群、芸術専門学群、図書館情報専門学群という形を取っていたが、2007（平成 19）年度に、大幅な学群の再編を行った。

その結果、現在は「人文・文化学群」「社会・国際学群」「人間学群」「生命環境学群」「理工学群」「情報学群」「医学群」「体育専門学群」「芸術専門学群」の 9 学群、23 学類へと再編成されている。学群の中には、例えば、「人文・文化学群」には「人文学類」「比較文化学

類」「日本語・日本文化学類」が属するなど、それぞれいくつかの学類を抱える形となっている。

大学院には修士、博士、専門職学位のそれぞれの課程があり、八つの研究科からなっている。研究科は「教育研究科」「人文科学研究科」「ビジネス科学研究科（東京キャンパス）」「数理物質科学研究科」「システム情報工学研究科」「生命環境科学研究科」「人間総合科学研究科」「図書館情報メディア研究科」で構成されている。

このほか、大学や大学院課程で分野を横断する学位プログラムなどの実施・運営をすることを目的として2011（平成23）年12月に「グローバル教育院」を設置した。

教職員は合計5161（うち女性2401）名、学生数は学群・学類が9840（同3914）名、大学院研究科が6685（同2346）名である。留学生は110を超える国から2372名を受け入れている。（以上2019年5月現在）



筑波大学の特徴としては、元来教育関係の大学だったため、全部で11の付属学校を持っていることだろう。1873（明治6）年に創立された付属小学校、1888（明治21）年の附属中学校、付属高等学校などのほか、視覚特別支援学校、聴覚特別支援学校がある。

また、筑波大学関係のノーベル賞受賞者としては3名。1965年の物理学賞受賞の朝永振一郎氏（東京教育大学元学長、名誉教授）、1973年物理学賞の江崎玲於奈氏（筑波大学元学長、名誉教授）、2000年、化学賞の白川英樹氏（筑波大学名誉教授）である。

日文：滝川 進

写真：筑波大学 FaceBook & instagram